

想
从
著
聞
奇
集

三

三四〇



想山著閑舟集卷之三

目録

- 一 元之大師談生水叔乃不思識の事
- 一 夢乃煙虫の事
- 一 戯り大法囊と賣る其病氣の接り替りする事
- 一 附大法囊の事
- 一 将人異女り逢する事
- 一 七足の精死人と煙丸の事
- 一 天色火の如く成ある事
- 一 油を賣る女の事
- 一 大蛇の事
- 一 金と通する枕念死く後去来する事

目録

- 一 英法盗現罰を蒙りある事
- 一 いもろ坊主に化ける事
- 一 英緩回船の事
- 一 電の降くる事

元三大師法堂水教の不思議の事

河内淡井郡三河村の玉泉寺といふ天竺家にて近年
色衣の列々ありは元三大師法堂の地なり奉堂を
二重造りし則元三大師の徳と安置せり堂の前より
井あり是元三大師の法堂水之なる井の如く常に清き
六尺のまり水は三尺なり清きくまことに清潔なり
は井昔より倒れて毎年七月七日は水と陸へるに
是るも井底なる水六七尺ありと出づる年によりて
十程のまり出づる時とあり是教の出るを期して
これよりとて^{元三大師}法堂の常備阿闍梨の院あり
比教あり居るは法堂よりとて^{元三大師}故長子教なる
は事委しく見ゆるなり

元三大師

三十一

井に沈居るもの出るのよはりなりとて同感なり
是る年^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
は教の多きとて^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
養長は教と侍とて^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
備前守長政の兵糧倉との山ありとて^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
是倉の教地中とて^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
なり又は教り不思議の事なりとて^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
置りて^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
是る三日のうちに^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
奉りて^{元三大師}法堂の地なり奉堂を
法に^{元三大師}法堂の地なり奉堂を

養の怪虫なる事



鶴川儀



思はるもは溪田慶の属中多田某伏用着の近平後
又而の陣巻活の表現へり見後より世因へり速よ安

きふ吐くたのり 平後より伏用
出ハ五十一丁あり

或人は筆記と見し是を令く曰く活を中絶の伏原

うの事ゆが馳一丈秋木のより有くも下に養一丈

居くお刺しけふよ面ぐく馳の身群もくめくくく

口向と線つぐと成との出く養の口へ事良善よ

く馳を次身に踏りまうりに覺たりとく根の事

諸國とを遊遊りたる者事と見えたり殊くもるあを

是とるを

又得野伊川院先生或時左の初燈の油細く虹のく

取く後くくはハ心竹成事と驚く能見とバ彼細く

節一或うか油を間二る餘を一向の極の下の板養の
口に入ると見ると是よりもぬ養をうひと成り
この事現り右先皇の御時り建武人の活り
又備前長門の藩中竹葉の小兒年七のりあり
或日暮合より熱出く夢中ゆきと泣出く泣
止り又泣出く何の病もや無(難)く竹葉をせし
と母に告ぐと母も何某便所行するに去藏の
壁の面より書と大煙出たり是ハ怪也と思ひ眺見
居ると奥ゆき小兒の泣出たり顔く大をまうた
らえ泣も止るも母竹葉を懐き奉るも元早も
大を燃せざるか志す眺め居ると又泣く大煙を
うり志すも母等々又小兒の泣出たり甚不審

養言録

三ノ四

思ひ急ぎ煙火と持りく大の出く而も見ると小兒の
顔もや而と焼く事ゆきと母養言のものを
抱へてより世の中より竹葉埋め居る様故始成り
養言と大なる釘ゆき養言と大なる後ゆく埋め居るが
は養死ゆきやと母片居る苦く居たりと母
釘と板養言ゆき母教ちたりたりと後小兒の泣も止
然と居り涙く常時小復りたりと是と母の多回
の父着る時牧村某と名なき居る藩中より
きたる時現り母を居る時と母に告ぐりゆき母
多回に居り母の元早五十年と母の事ゆき
天明の寛政の初の事と是も怪なる事也
相振喉の怪なる事と記すこの書ハ述く目録あり

とと耳囊々々随處に記しを致さし心はつと成りつと
ゆ念全交と抄出〜〜〜に載ぬ

般若の性事 附性事と般若の種成事

當中め〜回景の悟りくる、軌程の性異者より今より
あり〜交と見も多〜心も悟りくるもの之既り
もめバ子馬心氣衰（終に枯骨とあり人回と又床下に
善信〜王家の人替〜善へが事有りある善と
家に住る人何〜の煩ひ〜氣血衰へ〜成昔養うと
極むるに來り〜に竹の事とあり極下（死〜）水清
かき成る猫馳の類極漆は居〜とりま〜引〜極り
入り〜善信〜の事成り〜故に不思法心ありひ
床と難〜極下（入索〜）るに大〜の善信〜あり

蟾蜍

三ノ五

住居〜り〜毛髮枯骨の形骸を傳り首〜故全〜の
は業のり〜彼とのとお教〜捨〜床下と掃漆な〜
〜を彼病人と日〜増愈くる〜予壯年の時西人保
の牧野〜に居〜英皇の〜度面と詠め居〜に
春の事〜の酒例〜り大〜の毛虫石の〜と這ひ居〜り
〜に極の下〜り善信〜右毛虫〜り〜大余と漏れし
場而〜這ひ居〜の善〜者〜はと明〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
毛虫と及〜り〜見〜右毛虫の善〜の口の肉（入〜）る〜
年終〜善〜の人氣と吸ん〜も宜言〜ハ思〜も〜と〜ま〜
柳生氏の活〜り〜ハ上野寺院の庭〜善〜と〜り
〜〜〜り〜も〜れ〜と〜想〜に〜融〜創〜と〜死〜と
去〜と〜想〜〜〜〜に〜蟻の〜堂〜り〜居〜お望白右去と居て

見^みに^に匙^しの形^{がた}ハ^は匙^し共^{ども}と^と石^{いし}寺院^{いんげん}の^の形^{がた}なり

但^{たゞ}様^{さま}の^の是^{こゝ}の^の指^{さし}前^{まへ}向^{むか}へ^るハ^ハ通^と例^{れい}之^の女^をの^の礼^{れい}と^とも^も
指^{さし}先^{さき}と^と後^{のち}向^{むか}へ^るハ^ハ善^{ぜん}ハ^ハ心^{こゝろ}焦^{あせ}と^との^のま^まと^と老^{らう}の^の語^ご
語^ごリ^リ由^{よし}故^こ神^{かみ}能^よ別^{わか}別^{わか}お^お活^{くわ}り^{なり}

と^と云^いハ^ハ秋^{あき}ノ^のお^お遠^{とほ}有^ある^るお^お思^{おも}は^はる^る前^{まへ}条^{じょう}ノ^の怪^{あや}と^と
た^たり^りる^る善^{ぜん}も^もも^も指^{さし}先^{さき}ノ^の後^{のち}向^{むか}へ^るり^りや^や然^{しか}だ^{なり}
做^し之^の魚^{いさな}及^{およ}事^{こと}なり^{なり}
大^{だい}續^{じつ}縁^{えん}ノ^の事^{こと}ハ^ハ卷^{まき}一^{いつ}記^き色^{いろ}又^{また}善^{ぜん}と^と伏^{ふし}色^{しき}と
極^{ごく}善^{ぜん}ノ^の事^{こと}ト^トノ^の巻^{まき}一^{いつ}花^{はな}色^{いろ}又^{また}善^{ぜん}ノ^の後^{のち}聖^{せい}

記^き置^おき^なり

戲^{たわぶ}に^に大^{だい}陰^{いん}囊^{なん}と^と書^かく^くそ^そ病^{びやう}氣^きノ^の様^{よう}ヲ^つ整^とり^りる^る事^{こと}

附^つ大^{だい}陰^{いん}囊^{なん}ノ^の事^{こと}

市^{いち}谷^や田^{でん}町^{ちやう}四^し丁^{てい}目^め 字^あ井^い屋^や 小^こ海^{かい}野^の景^{けい}山^{さん} 云^い因^{いん}易^い觀^{くわん}相^{しやう}小^こ秀^{しゆ}

大^{だい}陰^{いん}囊^{なん}

三^{さん}ノ^の六^{ろく}

そ^その^の賣^う下^げ者^{もの}と^とは^ハ者^{もの}生^なれ^る甲^か別^{べつ}の^の中^{ちゆう}年^{ねん}に^にり^り伊^い豆^{ぢゆう}
浦^{うら}ノ^の之^の委^い任^{にん}居^ゐり^りハ^ハ時^{とき}景^{けい}山^{さん}ノ^の隣^{りん}家^かに^に庇^ひ守^{しゆ}陰^{いん}囊^{なん}リ^リ
ハ^ハ後^{のち}方^{かた}成^なす^すと^と米^{まい}六^{ろく}斗^とと^と兼^{かね}り^り入^いた^たり^り程^{ほど}ゆ^ゆ形^{かたち}ち
丸^{まる}く^くと^と是^{こゝ}と^と前^{まへ}ノ^の方^{かた}へ^へ傾^{かたむ}く^く度^た一^{いつ}指^{さし}ノ^の頭^{かぶ}より^{より}畢^ひ丸^{まる}
ノ^の方^{かた}か^か高^{たか}く^く前^{まへ}より^{より}見^みる^ると^と肩^{かた}ノ^の陰^{いん}囊^{なん}リ^リ隠^{かく}れ^る
見^みえ^える^る程^{ほど}ち^ち極^{ごく}外^{がい}ノ^のも^も業^{ごう}ハ^ハ形^{かたち}ゆ^ゆる^るが^がゆ^ゆえ
陰^{いん}囊^{なん}ノ^の胸^{むね}ノ^の間^まより^{より}も^もと^と伸^のび^びる^る脇^{わき}後^ごへ^へ面^{めん}つ^つ自^{みづか}中^{ちゆう}は
手^て履^り草^{くさ}鞋^せと^と造^{つく}ら^る高^{たか}い^い下^{くだ}之^の烟^{けむり}と^と云^い居^ゐる^る
た^たり^り或^{ある}年^{ねん}十^{じゅう}月^{げつ}二^に日^{にち}ノ^の夜^よノ^の事^{こと}なり^{なり}ハ^ハ大^{だい}陰^{いん}囊^{なん}ノ^の裏^{うら}ノ^の
方^{かた}に^にお^お腹^{はら}ノ^の骨^{ほね}成^なる^るが^が髪^{かみ}並^{なら}び^びの^の収^ひひ^ひる^る名^な之^の徳^{とく}
大^{だい}勢^{せい}集^{じつ}り^り地^ち乞^ぎ成^な皆^{みな}夜^よ更^{さら}と^と酒^{さけ}飲^のみ^み大^{だい}勢^{せい}前^{まへ}と
取^とり^り居^ゐる^る信^{しん}ノ^の門^{かど}より^{より}書^かけ^ける^る大^{だい}玉^{たま}八^{はち}束^{たば}麻^あ呂^{りよ}と

同より皆揃めき法極深まりちて心多き者たあらんま
 非く之故名を物之太生故のこ思入り強き愛か乃
 景山と云ふ名はババい敷り加り大玉の形へ三考より
 板破のほまりに名を敷きこち板をむか余り見事之
 ナレト亦未に吾あ一賣り其まきやと云彼者皮を
 之板松の和を伊豆の國中めくの名あり吾あやま
 めくかうまきせぬこ子あけを賣りをせませうと意入
 イヤ支た言申願く色くをイヤノ中願ふと云
 以故彼景山又敷又河と流りやう成程はまを名を
 吾あやの賣まうまう進こまを誰も買まう中を
 かくもあわく心買たをまきせああけくハ安らりの
 又賣人もあわくを思ひ切く故と云賣りかん

大陸囊

三ノ七



寺

病氣の是り入るるを食と只一夜見交り是の由を
 米式に入程の大ききほどと病氣法囊より溢きと
 右の是り入は是股の而のちき元並の人の腰の由り
 程も何るごとく是背りあり少くハ細々も是のゆひ
 とも肥大なり凡ハ埋め込る松り成居たりを又合
 肌合を前り云居極の申し同し事之は者ハ乾きと
 能るんえ色るるままを辨とのさかりたふあとなり
 重ぬる外大法囊の乞食ハ江戸もも遊遊見合也
 事と者どもも是を辨とまらりてず又平が友
 山崎義成文化十二年己酉戸塚若無形せ時使来又
 席とあは法囊のより飯と色くあはるる一とあ
 積と乞居ると見交り是ハ三代目の大墨丸と

大陰囊

見入るるといふなり



又云今加味茶に和りて大器の乞食江戸又出来たり玉の

ちき茶二斗入袖ももくはしんあまはる
入るうらうらう因痛うう元華丸の脇は渡梅の実候成
痛も来しと人の云り候を交とま下故も痛候は
成出ー逐り候のこももの成難候せ申合華丸ハ
別々ー因痛の中は混とま成苦家乃出候種くの
異痛も首ののちり

将人異女り逢する事

市谷自護院小西應房と云道心坊主あり老年あり
節骨候ゆ朝後後連の腹引草鞋ゆう角のまど丸
本とまり成之本の糸を拾ひゆせ働く事着る男ども
より八邊り増り終有働と居る逐は右院之役
係候り本迎性まとうりい西應房ハ尾浪の國中為候一乃
是事ハ次の巻り記一巻ぬ

異女

云の産るも少まの將と好は元彈の國りゆ物人成
信州ハ勿論義濃加賀越前中ふまも山後まに渡り
歩ゆ物書一まも怖りゆと思ひまのゆ
一に或時歩候も餘り獲ある故置しと海
所嶽山乃麓の方へ深しとけ入る取と明一朝乃
ゆり猪ゆも懸えんと候と待居る事もゆ方ハ東も
かーちと想ひは小まら華一より秋もあると四方と
見合一明るとまはと信居るに遠向の嶽嶽山の方より
篠竹とありある者らも折子竹も見極めると甚ど
不審に思ひ候見まは女と候は方と目懸て
来まは深山ハ假令をゆも女乃行ゆと候
ま新明方るぐに女乃來の道理絶くゆと善

いひたるハ我之故願の竹村の竹某の増也今より十三
二前月七月の事なり。近きつらりの川へ物流ひよ
初に道より因縁のまきまき入り山の新成
きり物をも故つる告るうたうまは父母ハ是を
そ自と我忘自として常々思ふ所ハ供養のあ
路ふく基と前と事なり。まづなりを印くま
障得と成り我既けはあまき年ら切と候
元年ハ珍磨の神と成り一級の昇進とも候事
依きり御るに世七月ハ十三回忌は又成り
佛事供養と成り我既と弟ひまづなを
障り成り元年珍磨の神と成り事叶ひ難
父母は告知を及思へとも告る事叶ひ難
又唯

異事

三十三

頼むと人との。是と父母り告るんハ
の。日頃心の。返るり候。彩。ま
竹事故の。父母は。対面。然。は。事。告
我。佛事。は。佛。依。一。依。其。な。板。傳。え
ら。女。共。去。り。障。事。其。思。ひ。と。好。て。文。の
早。見。一。序。り。將。裝。束。と。ぬ。捨。け。信。別。一。教。の。父。母
と。為。り。い。事。と。具。り。告。る。よ。今。に。存。命。成。事。の。や
父母と初。知。り。且。驚。と。且。怪。と。り。と。で。は。女。を
出。り。ハ。十六。歳。の。時。と。西。後。房。の。名。ハ。十。三。年。終。り
の。事。と。是。と。夫。法。十。夫。中。の。女。女。見。え。と。岩。嶽。の
り。や。り。事。ハ。人。間。ハ。思。へ。り。と。い。庵。り。と。事。と
考。つ。る。に。仙。女。の。岩。嶽。の。養。素。の。成。ハ。女。神。の。御。神。也



かの憂を奉り、憂をも知ぬ人も多し、心花も云をり
 は輔ハ悪祖と食ふは急者、漢人ども自強り稱せし
 奉る時ハ竊り遠方へ賣きまじ奉るとり、徳堂紙若
 めく蛇の化し、うる精を七足たりとく、是とくつむ又
 蛇の化し、うる元是をくそとり、所よりく遠ひ河
 奉るや、蛇の精を化し、うる法を粗は色
より雲く、方り記き、色一
 天色火のぬく成する奉
 明和七年庚七月廿八日、奉成が、西園名古巻ハ、毛白を
 別く暑氣、清く志のき、兼か、日暮く、後山の方の
 空を赤く成る、故地ハ、大山出火たりとく、大山、六里、云馬り
 天色ども、伝く、天色赤く成ぬ、是ハ、つる成事、ぞと、正書と
 ち、ち、肉よ、毛赤色、回も、形く、名古巻乃方へ、蔽ハ、怒り、く

後中を満天砂ふりたり平一面り火のごとく赤く
 散る中よ松葉の後のごとく落白と長と條をて
 自然とちり散りて散る雲の走の如く是とたして
 行くと分り兼いとも甚だ不審味なる景色にばと
 如行散り事ごとく思ふ人々奇異の思ひとすりり三
 刻とて漸く小落り散り九ツ頃り即ち消えたり
 勿論何の故とていふまじも唯好まざる味なりと
 かりし事ゆゑとて毎々父母の世と安んじ又は短
 暇馬松遠藤ゆゑ能く安んじたるま書付る人々
 竹腰某ハ青の如く居る故天が一面り赤く散り出
 見え人々赤の如く居るに何天が赤く散りたる
 とや又重々赤く散る時は起り見ると一と云捨る

天変

三ノ十八

即座より散りたり能く安んじたるま書付る人々
 赤く散り出ると散る雲の走の如く是とたして
 行くと分り兼いとも甚だ不審味なる景色にばと
 如行散り事ごとく思ふ人々奇異の思ひとすりり三
 刻とて漸く小落り散り九ツ頃り即ち消えたり
 勿論何の故とていふまじも唯好まざる味なりと
 かりし事ゆゑとて毎々父母の世と安んじ又は短
 暇馬松遠藤ゆゑ能く安んじたるま書付る人々
 竹腰某ハ青の如く居る故天が一面り赤く散り出
 見え人々赤の如く居るに何天が赤く散りたる
 とや又重々赤く散る時は起り見ると一と云捨る

入口新篇と云 はなはだの入口の 西の紅雲と云 藤籠屋へ入り
息とほげうに着てその好む彼を待つて梅の下
の いさゝか海の下 梅 梅の下にも 奥の二回へ連行顔形ちもよき飯盛
女と出〜くもバ酒なども彼音〜時もういり面〜
雲霞の弊りともう〜り梅のよき日ハ俄雨〜客も
多〜故女ハ外外の音の〜入リ蒲団被も膚〜付り
い座敷ハ海中へ遣り出せ〜座敷〜次〜
風雨と強り座の下下の波の満ち〜あ〜
ま〜座敷と文のよき外外の座敷の弊りとも
静り物の音も絶え〜入物〜好りたる故外と
や〜故女女の来ると侍座〜内よ故女ハ〜故事
少や〜座敷と好〜好来〜やと心の内

油尊

三ノ十二

少ん思ひの〜座敷の顔〜居〜女例へ居
り〜座敷の思ふよた〜座敷と梅と梅子
ゆき長ハ竹の癖乃有女好〜座敷〜居〜
故女又能藤たる梅子とたり〜梅と湯の方へせ
能捨〜志〜又例〜能藤と
聽〜又例〜梅と湯の方へせ
大事乃音の方へ書〜書〜
た〜火口と向〜竹〜
目と〜梅〜梅〜
顔〜梅〜梅〜
吸〜梅〜梅〜
〜梅と消〜梅〜梅〜

ひとし〜舌舌と〜葺ふ有さぬ〜も也り也
 志願するに相好く者胆が
獨歩の名人世 独歩の名人世
能備ゆく疾物の美似とるも幸そ吉今 能備ゆく疾物の美似とるも幸そ吉今
 人遠き奥座愛め〜聲をさると〜今夢〜入
 と喪く胸を落付〜見居らるや〜顔と出〜は
 好むと裁人風情心のまよひも初乃美繋り〜
 裏の顔〜成〜根の心筋〜
 毛の毛と〜心代〜
 乃の毛と〜
 顔〜面〜例へ来り被とま〜



大雅



と其故其物にまじりて起し居下(堅也)と女も
 垂り付来り水に沈まふのこころを笑ものこ
 階子と云ふ人々も先ゆくゆののこころ思ひしや
 うけ来りて階子の下めく引出らるるこころは
 生ある心地も好し力よ任せしこころをち階子と云
 と女も共々付来り勝子もた存ぞ香の男も居る
 いう成事と云女もつ成事と云と云と云と云と
 蘇木ハハ付りハゆり福を免の都合悪なり藤也
 たり海のこころを若さ者とも女も色もせひに
 降りたらし敷あま者女と叫りたまへる勤めうご
 悪愛故のこころハ女も困りて顔色も紅筆
 堪忍し朝と居り下さるる返さるる顔付を

事ゆへん〜二人〜幾へともま〜勅命を浴るる
たまは〜まゝもあはれ〜少〜心も落付まゝその涙と
母〜うらみ〜せむ〜う事ハ存せ給〜と何〜女ハ
たま〜た〜えももの〜水りま〜る舌が着る性成神成
ゆ〜とあ〜さう〜はひ〜た〜別〜ま〜ま〜に〜成〜水り
薬にた〜ふ〜さ〜器口〜め〜た〜ま〜は〜り〜心〜燃火
ゆ〜燦りま〜ると思〜う〜た〜る〜ま〜ま〜り〜事也と
ゆ〜と〜笑〜〜又〜あ〜い〜〜〜面〜し〜〜ら〜ら〜い〜同〜あひ
う〜り〜大〜数〜い〜う〜る〜事〜〜始〜〜心〜も〜け〜又〜能〜う〜に
え〜東〜右〜女〜は〜ま〜ま〜も〜能〜害〜候〜も〜わ〜能〜中〜〜世〜心〜乃〜飯〜盛
中〜〜何〜の〜者〜の〜ま〜ら〜る〜も〜何〜の〜ま〜い〜〜は〜要〜え〜せ
ぬ〜成〜り〜居〜る〜よ〜の〜坐〜〜ま〜ま〜面〜り〜〜成〜候〜〜合〜点〜の

たま〜も中〜唯今世をわ〜〜と思〜へ〜り〜海〜と
ま〜時〜を〜流〜る〜心〜地〜も〜な〜〜命〜捨〜い〜と〜の〜せ〜〜福〜よ〜思〜及〜ま
何〜の〜や〜り〜の〜あ〜ま〜ま〜事〜は〜え〜生〜活〜遣〜り〜る〜女〜と〜の〜男
具〜一〜吐〜〜たり〜ま〜好〜〜更〜切〜〜逆〜め〜る〜を〜其〜の〜性〜を
何〜の〜づ〜〜世〜め〜ら〜る〜格〜乃〜昌〜遠〜め〜〜妖〜物〜の〜ま〜い〜〜と〜ま
〜ら〜〜も〜ま〜ら〜ん〜る〜性〜を〜〜平〜が〜友〜同〜者〜何〜某〜乃〜吐〜〜と〜ま
或方乃奥方には病と〜の〜情〜笑〜垂〜る〜事〜も〜あ〜ら〜の〜性
〜も〜ま〜ま〜〜好〜愛〜も〜好〜ま〜事〜も〜や〜お〜の〜を〜餘〜り〜驚〜る〜ぬ
〜と〜道〜さ〜ら〜り〜ま〜〜驚〜る〜も〜〜笑〜〜や〜危〜も〜ま〜あ〜も〜た
甚〜及〜り〜わ〜り〜〜〜は〜妖〜魔〜の〜類〜〜申〜舎〜〜〜命〜と〜共
も〜ら〜〜も〜事〜な〜ま〜巴〜竹〜も〜中〜難〜と〜事〜也

大蛇の事